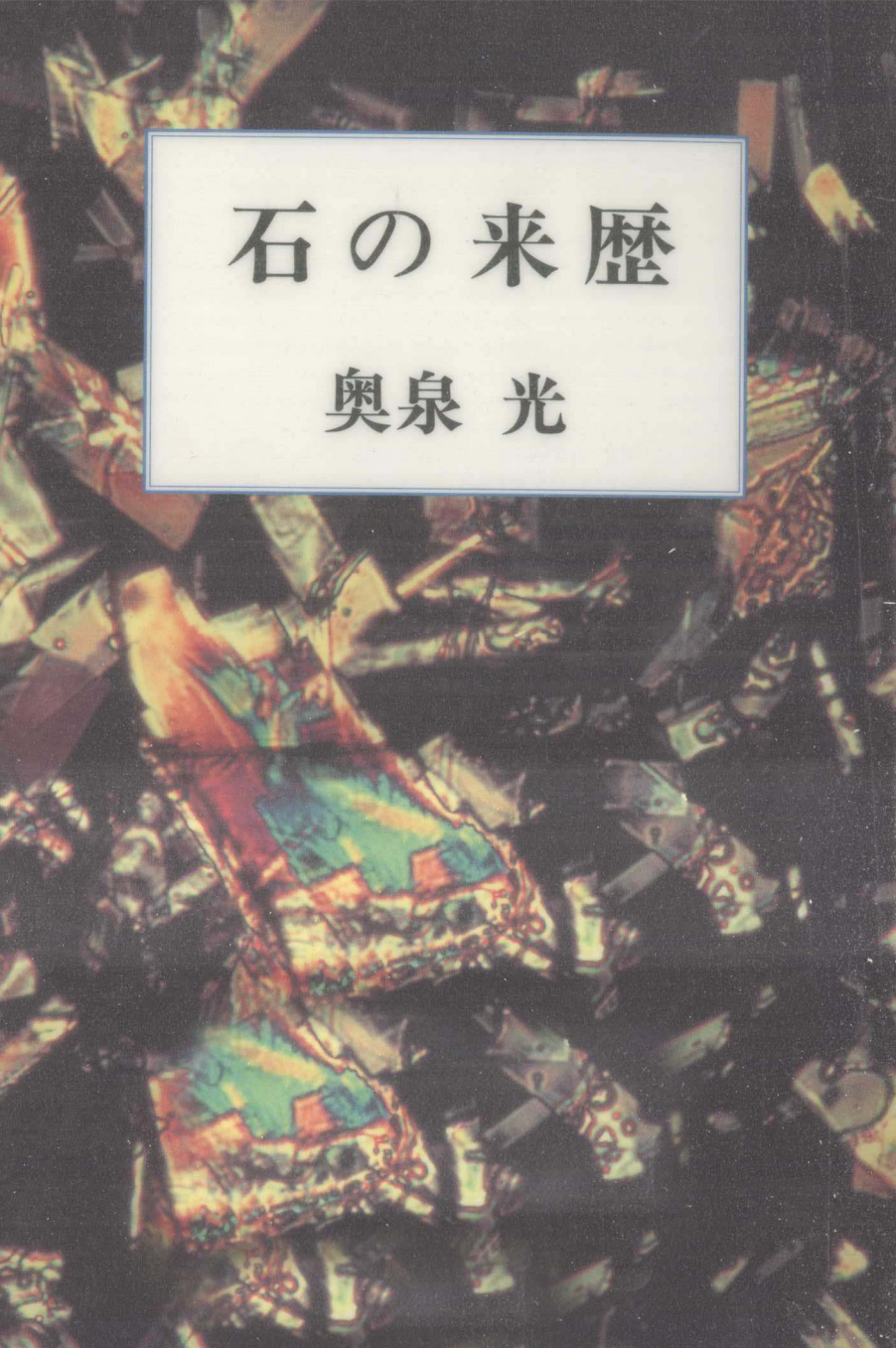




石の来歴

奥泉 光

石の来歴

奥泉 光

奥泉光
昭和三十一年山形県に生れる。
国際基督教大学大学院比較文化
研究科博士前期課程修了。処女
作「地の鳥・天の魚群」でデヴ
ューする。「滝」「暴力の舟」
「三つ目の鮫」が芥川賞候補作
となる。「ノヴァリスの引用」
で瞳目反・文学賞、野間文芸新
人賞を受賞。

石の来歴

平成六年三月一日

第一刷

定価はカバーに表示してあります

著者

奥泉光
おくいずみ ひかる

発行者

阿部達児

発行所

株式会社
文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三一二三
電話代表(〇三三)三二六五一一二二

印刷所

大日本印刷

製本所

加藤製本

万一、落丁・乱丁の場合は送料当方負担でお取
替いたします。小社営業部宛お送り下さい。

©OKUIZUMI HIKARU 1994

Printed in Japan

ISBN4-16-314620-2

目次

石の来歴

5

三つ目の鯨

103

石の来歴

装釘 山形正治

カバー写真／K. FISHER／CAMERA PRESS／PPS通信社

石の来歴

あなたがたに言っておく、もしこの者らが沈黙するなら、石が叫ぶであろう。

『ルカによる福音書』——十九章四〇節

I

河原の石ひとつにも宇宙の全過程が刻印されている。後年真名瀬剛が岩石蒐集に打ち込むに至った最初のきっかけは、太平洋戦争中の昭和十九年師走半ば、フィリピンはレイテ島北部の山岳地帯、カリガラ湾を臨む熱帯雨林に穿たれた天然洞窟のなかで、ひとりの男から聞いた話である。

限度を超えた栄養不良とアメルバ赤痢による消耗の果て、針金細工に洗紙を貼りつけた趣の顔面にあつて、そればかりが敏捷に動く眼で真名瀬を眺めた男は、すっかり肉が削げ落ち痩せ牛蒡^{ごぼう}みたいになった指に傍らの石を摘んでみせると、これは種別するなら緑色チャートという石であると講釈を述べ、いまわれわれがいる洞穴は古生代に堆積した岩床が隆起し海食を受け生じたもので、その後さらに新生代第四紀に海水面が後退して森林の洞穴になったのである、

したがって周囲の壁には海棲生物の化石がたくさん含まれているはずであり、このかけらにしても、子細に顕微鏡観察をするなら、放散虫等の生物化石が必ず見つかるのだと断言したあと、おおよそ次のような事柄を語った。

君は普段路傍の石に氣をとめることなどないだろう。庭石や石材ならばまた話は別だろうが、おおよそ石や岩などは詰まらない、ただ意味もなく山河野原に散らばっているもので、邪魔にこそなれわざわざ手にとって眺めてみる価値などないと考えているのだろう。だがそれは違う。変哲のない石ころひとつにも地球という天体の歴史が克明に記されているのである。たとえば君は岩石がどうして出来るかを知っているか？ 岩石はマグマから生じる。赤熱のマグマが冷え固まって岩になる。岩は地表の風化作用で細かく碎かれる。それが石である。石はやがて砂になる。砂は土になる。石や砂や土は今度は水に運ばれ、湖沼や海底に堆積し、凝って再び岩になる。と岩はまた碎かれ石になり砂になり土になり、あるいは地下深く押し込められ熱と圧力が加われば、多種多様な岩石に生まれ変わって、さらには再びマグマに溶けて元に還っていきもする。鉱物の形は一瞬も静止することなく変化している。素材は絶えず循環している。永劫不動とみえる大陸にしても僅かずつ移動しているのは君も知っているだろう。つまり君が散歩の徒然に何気なく手にとる一個の石は、おおよそ五十億年前、後に太陽系と呼ばれるようになった場所で、虚空に浮遊するガスが凝固してこの惑星が生まれたときからはじまったドラマの一断面であり、物質の運動を刹那の形態に閉じ込めた、いわば宇宙の歴史の凝縮物なのだ。

固い岩床に横たわって語り続ける男の話を真名瀬が印象深く思い出したのは、それから随分時間が経ってから、カランバンの捕虜収容所で一年半過ごしたあと復員し、実家の疎開先に落ちついてからのことで、悪臭充満する穴蔵で聞いたときには内容とは全然別の事柄に氣を奪われていた。

ひとつは蛆である。脂肪と肉がなくなると眼球が飛び出たようになるから、飢餓で瘦せ細った人間の眼が無闇に巨きく光ってみえるのは自然である。骸骨に目玉をくつつければ否が応でも際立ってみえる。ところが衰弱した人間の眼はたいてい固着しているものなのに、喋り続ける男の眸がやけに活発に動いているのが妙である、不思議に思つてよくよく観察してみれば蛆であつた。目玉のなかで蛆が蠢いていた。蛆そのものは珍しくもない、皮膚の下を無數の蛆が這い廻る腐乱死体などは至る所でみかけたし、熱帯潰瘍にやられた彼自身の膝の傷にも膿にまみれてぞろぞろいたけれど、息をして話をする人の目玉にたかる蛆ははじめてだったから吃驚した。

だがなにより驚いたのは「君」の呼称である。十八年の正月に召集されて以来、山梨の歩兵連隊から南洋の戦地に至るまで、真名瀬が「君」と人に呼びかけられたのはそれが唯一はじめての機会で、しかも相手は階級こそ上等兵ではあるものの、齡上の古年兵であつたから、その人から出し抜けに君といわれて、君とはいつたい誰のことかと不審に思い、それが他ならぬ己を指すのであると悟るやひどい狼狽に見舞われ、中空に落ちつかぬ視線を漂わせるばかりだつ

たのを覚えてゐる。

困惑したまま真名瀬は傍らに寝そべり眼をつむった。正気はとうに失つていたのだろう、上等兵は洞穴の暗がりに向かつて喋り続け、その声はしばらく背中越しに耳に届いていた。戦場の眠りは必ず気絶に似た仕方であつたから、軀を横にしてなお人の話を聴けたはずがないにもかかわらず、言葉が頭に残つたのは不思議といへば不思議であつたけれど、たとへば収容所で耳にした怪異の数々、暗い波間に十二単の女がいて、こちらに來いとしきりに手招いていたとか、鯨ほどもある半透明のクラゲみたいな生き物が、雲のうえに漂うのを戦闘機から目撃したといった話に較べるなら、記憶装置の奇妙な働きなどはたいして訝るには足らなかつた。あるいは飛行機の唸り声や砲撃の炸裂音が絶えず響きわたる戦地で聞くには、あまりに場違いな言葉が強い印象を刻み込んだのだとも考えられ、いずれにせよ、遠く月日を隔てるにつれ戦時の記憶が加速度をつけて薄れゆく一方で、洞穴の上等兵の語つた言葉ばかりが鮮やかに甦るの間違ひなく、やがて自ら好んで石をいじるようになれば、言葉は明瞭な形をなして確固たる場所に根を下ろすようになった。

岩石蒐集をはじめた動機は何ですかと人から訊かれるたびに、真名瀬は最後に武装を解かれるまで僅かな時間を過ごしたレイテの洞穴に思いを馳せ、しかし問いにはうまい言葉がみつからなくて、雄弁とは対極にあるその人柄にふさわしく、險の奥に引っ込んだ小さな眼で慎ましく笑うことでいつも返答に代えた。

真名瀬の父親は神田で古書業を営み、華々しく言葉を飾る新聞報道とは裏腹に、戦局の秋風が誰の肌にも感じられ、本土空襲の噂が密かに囁かれはじめると、いち早く店を畳んで遠縁のある秩父に移り住んだ。疎開した当初は農家の土蔵を間借りして不自由に暮らしていたものの、まもなく貸主の家が絶えると、頼まれて母屋を敷地ごと買い取って一家を構えた。昭和二十一年の春に真名瀬が引き揚げてきたときには、父親はすでに持病の心臓で亡くなって、シラカシやクスの大木が鬱蒼と生い茂る屋敷には母親と二人の姉が残されていた。さっそく戦争前に働いていた上野の印刷屋に行ってみたところ、一帯はいまだに焼け野原、世話になった社長を方々探してみたが行方は知れず、仕方なく秩父に戻って、姉たちの庭の畑仕事を手伝う傍ら、父親が店から運んで土蔵に仕舞い置いた書籍類をリヤカーに積んで行商をはじめた。

秩父などは小さな町だからいたいた商売にはなるまいと思っていたところ、意外にも本はよく売れ、月に一度は担げるだけの書籍と野菜を抱えて東京に出、帰りにはぼちぼち出始めていた新刊雑誌の類を、父親の古い顔を使って仕入れた。まもなく人々の腹具合が落ちつくにつれて、紙に活字が書いてあればなんでも売れる時代がきた。戦前の岩波文庫などは飛ぶように捌け、戦時中鬼畜米英の掛け声に死蔵されていた英米文学関係の書物を蔵から出すや、吃驚するくらいの高値がついた。ことに父親が半ば道楽で蒐集していた黄金期の探偵小説は、噂を聞きつけた遠方のマニアからの問い合わせが殺到するほどで、手書きの蔵書リストを作って神保町

の知り合いの本屋に置いて貰ったところ、これがあたって、邪魔なばかりで一銭にもならぬと母親を嘆かせていた書物の山は、みるみる減って現金に変わった。

元手を得た真名瀬は秩父の市街地に店を出した。狭い空間をさらに二つに割って、古本と新刊書をそれぞれに置いて、半年後には店舗を広げて貸本もはじめた。二人の姉は洋裁和裁の腕を活かして注文をとり、結構近所の評判になって忙しく、隣家の娘をアルバイトで雇うほどで、農家の広い土間はさながら縫製工場みたいな有り様となったから、一家が生活に困る心配は消えた。

石を集めだしたのはこの頃である。家は市街から外れた盆地西側の、山岳に繋がる丘陵地にあつて、自転車で店まで通う真名瀬は、途中荒川に架かる橋で自転車を停め、河原に降りて一服つけ、武甲山をはじめ秩父の巖々たる山並みを眺めやるのが朝夕の日課で、盆地に特有の湿熱にはやくも肌がじっとり濡れたある夏の朝、靴を脱いで流れに足を漬けていると、水の中に燦めく鳶色の石に眼がとまった。あんまり光るので拾って子細に観察してみれば、生地に散った微細な粒が輝きの正体であるらしく、掌のなかの石は陽を受けていっそう眩く輝いている。

その日の仕事を終え、家に戻って風呂も食事もすませた夜刻、朝拾ったものを机に置いてみると、乾燥した石肌からはすっかり輝きが失せ、色のくすんだただの石ところにすぎなくて、少々がっかりはしたけれど、翌日にはまた二つ三つ拾って持ち帰った。数日後、どこかに金魚鉢があつたはずだと思い出し、水を張って石を沈めてみるとなかなか具合がよろしい。それか

らは色の綺麗なもの、模様の面白いもの、形の珍しいものと、毎日少しずつ集め、石の詰まった水槽が五つ六つ、居室にしていた土蔵の二階に並ぶ頃になって、たまたま店にあった書物に石を磨く方法が出ていた。動力で回転する円筒に砥石粉と水を混ぜて研磨すること、しかし河原の石はだいたい天然の研磨でつるつるしているから、仕上げのところだけやればいいのだろうと思って詳しく読んでみると、艶出しには酸化セリウムを使うべしと、聞き慣れぬ化学物質の名前が書いてある。いきなりセリウムといわれてもあてがないので、試しに木工用のワニスを塗ってみたところ案外にうまくいく。金属の艶出し剤やらなにやら、雑貨屋を廻っているいろいろな種類のニスを買い集め、夜毎独り部屋にこもって石を加工するのがそれからの日課となり、いじっているうちには飾って眼に楽しむばかりでは飽き足らず、体系的蒐集への欲求が生まれた。

まずは石の名前を知らねばならない。益富壽之助博士の『原色岩石図鑑』が出版されたのが昭和三十年であるから、当時は手頃な邦語の図鑑がなく、しかしそこは商売柄、子供向けの図書など集められるだけを集め、机に並べた石ころを眺め暮らしたものの、いっこうに埒が明かない。形は割れ方で雑多だろうが、無色透明でもあるまいし、色はどうしたって決め手になるだろうと思っていたら、意外にも同じ岩石種でも色合いはさまざまだったりする。カリウムや鉄やナトリウム、金属元素がほんの僅か結晶に混入しただけで色は違ってしまふものらしく、たとえば同じ花崗岩でも白っぽいものもあれば赤味を帯びたものもあり、明るいのもあれば暗

いのもあるといった具合で、それでも結晶が大きい花崗岩はまだいいので、虫眼鏡ぐらいでは結晶の粒が視えぬとなればもうお手上げである。岩石を切って磨いた薄片を偏光顕微鏡で覗き、造岩鉱物の質を調べたところで岩石同定は最終的に完成するのであると、本の叙述は無情にも素っ気なくて、すっかり途方に暮れながら、それでも諦めずに手引き書にかじりつき、親譲りの眼と指を最大の武器に、塩酸をかけたり磁石で試したり、割ったり掻いたり嗅いだり舐めたりと、さんざん苦勞した甲斐あって、半年もする頃には基本的なものは手に取っただけで分かるようになり、土蔵の机一面に名札の付いた小石が並ぶようになった。しかも幸運なことに、店によく来る地元高校の地学教師とまもなく知り合いになって、専門家に訊くあてができ、彼の好意で長らく垂涎の的であった五十種類の岩石標本セットを譲りうけるに至って、分類作業は飛躍的な進展をとげた。

そうなれば河原の石では物足りない。週に一度の休日には、地形図片手にハンマーを腰に、秩父連山の山々に分け入り、露頭から露頭へと駆け回った。曲がりなりにも専門的な野外採集が楽しくて、最初のうちはついあれもこれもと欲張ってしまい、準備したズツクの袋が持ち上がらぬこともしばしばであったけれど、知識がつくにつれて狙いを持って山に入るようになり、ハンマーを振るう手さばきも鮮やかに、石理に沿って的確な大きさの標本を採集できるようになった。

知ってみれば嬉しいことに、秩父は地質学のメッカともいえる所であった。古生、中生、